

鈴木俊裕

横浜文学

散歩

改稿



すず き とし たか
鈴木俊裕

1951 年，神奈川県横浜市中区山下町に生まれる。

早稲田大学文学部日本文学科卒業。

現在，神奈川県立高等学校教諭。

1993 年より，横浜近代文学研究会を主宰。

著書に『あすかのあや』（詩集），

『鈴木俊裕・笠原博明脚本集（門土社総合出版刊）』がある。

現住所 横浜市戸塚区戸塚町 4439-16

改稿 横浜文学散歩

著者 ● 鈴木俊裕

編集 ● 田邊道子

発行所 ● 門土社総合出版株式会社

横浜市戸塚区下倉田町 1478 番地 ☎ 045(864)0244 番

発行者 ● 小澤紀子

平成 5 年 6 月 15 日 初版第 1 刷 発行

制作 ● 同林工房／印刷製本 ● 藤原印刷

©1993 Suzuki Toshitaka

ISBN4-89561-157-4 C0095

鈴木俊裕

横浜

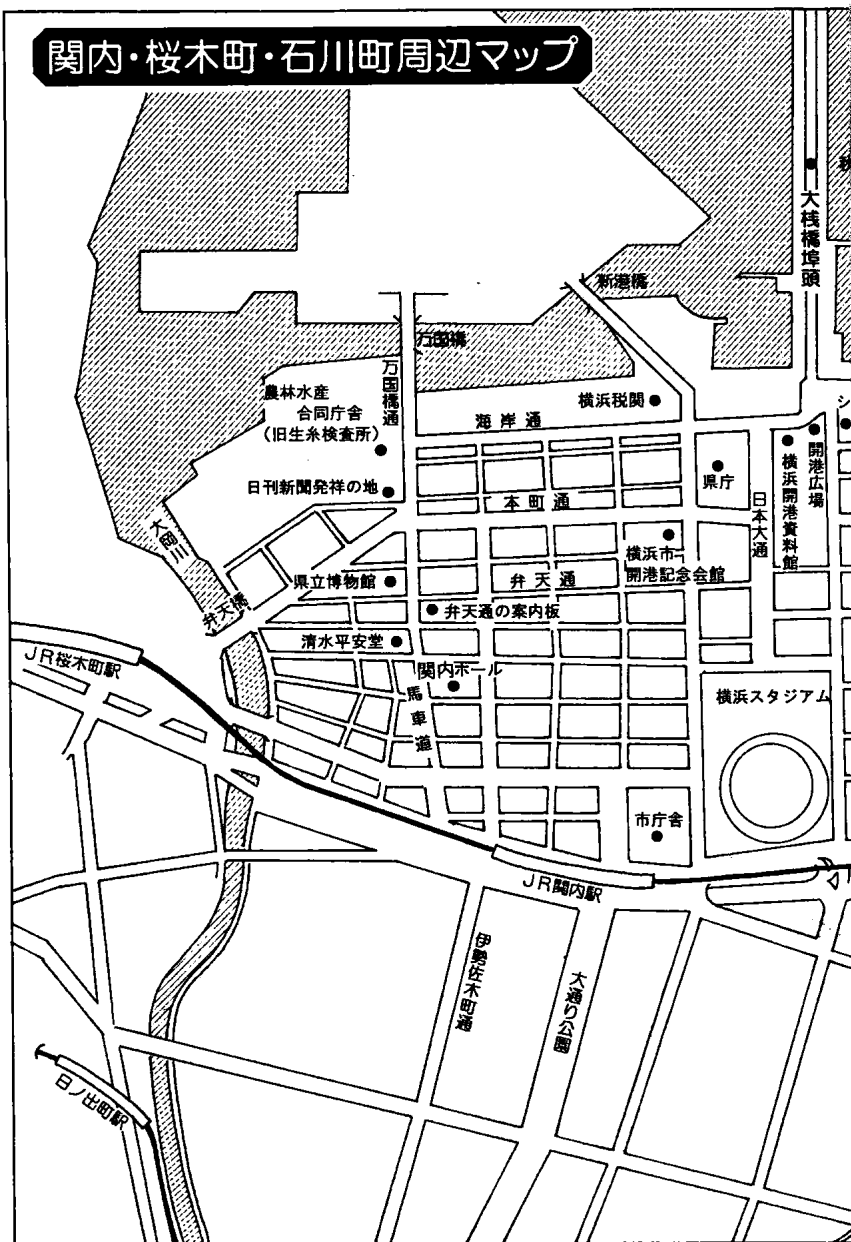
改稿

文学散歩

門土社総合出版



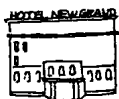
関内・桜木町・石川町周辺マップ



靴の少女像

ニューグランド
海に見える318
大佛次郎が執
察に使用した。
馬天狗の部屋。

「かもめの水兵さん」記念碑



町通

ヘボン博士邸→p.103
ヘボン博士は日本最初の
和英辞典を作った。
ヘボン式ローマ字表記
も博士の家。

中華街

大佛次郎記念館→p.10
大佛が生前に収録した
27,000冊の蔵書を基に
している。自筆原稿・創
作ノート等も展示。

山手ゆかりの作家

→p.84 谷崎潤一郎は
山手に住んだ。他に中
里恒子「西洋館」、秋本方
郎「異人館の女」、曾野綾
子「わが恋いの墓標」、立
原正秋「舊藤原歌」、川端
康成「乙女の港」など。

泉立近代文学館→p.95
夏目漱石や森鷗外など
近代の神奈川ゆかりの
作家を紹介。様々な金
画展は内容が濃い。



外人墓地→p.78
異国の地日本で果てた
有名無名の外国人
4,000人余が、海を見渡
すここ外人墓地に眠る。



ゲーテ座→p.86

北村透谷・坪内逍遙・
佐佐木信綱・和辻哲郎・
小山内薫らが観劇に訪
れた。今は岩崎博物館。

山手資料館→p.83

横浜唯一の木造西洋
館。文明開化期を偲ぶ
資料を展示。有島家が
寄贈したというテーブ
ルも。

中島敦文学碑→p.47
中島が教鞭を執った元
横浜高等女学校の跡地
に建てられている。碑
文は「山月記」の冒頭。

交→p.136
学校。ハマの
呼ばれ、野尻
林透馬・余志
った。

JR石川町

山手通



蓮光寺→p.20

吉川家墓所。「かんかん
虫は唄ふ」「忘れ残りの
記」等にはハマの風景
風物が描かれている。

根岸競馬場→p.73

菊池寛・舟橋聖一・吉
尾信子など各界の競馬
好きの面々が集まり社
交場となっていた。



八雲殿→p.71

政治家安達謙蔵が私費
を投じて精神修行の場
として建てた。今は郷
土資料館。



三溪園→p.68

佐佐木信綱・岡倉天心・
横山大観をはじめ多数
の芸術家のパトロン原
富太郎が造った庭園。



横浜文学散歩マップ

秋元不死男句碑→p. 106
北吹の 船腹垂る 冬嶋

横浜税関→p. 42
有島三兄弟(有島武郎・有島生馬・里見弴)は父武の税関長就任に伴い横浜に移り住む。

大桟橋→p. 105
森鷗外を追ってドイツからエリスが来日し、また別離したのもここ横浜港の大桟橋。

日刊新聞発祥の地
→p. 113 明治3年、活版・西洋紙を使った日本最初の日刊新聞「横浜毎日新聞」が発行される。

神奈川県立博物館
→p. 118 旧横浜正金銀行。ここで、登山家であり紀行文家の小島島水は石川啄木と出会う。

横浜開港資料館→p. 108
幕末から開港、明治・大正期の横浜に関する貴重な資料が数多く集められている。

横浜市開港記念会館
→p. 110
この赤レンガの時計塔の愛称はジャック。会館前に岡倉天心生誕の地の記念碑がある。

清水平安堂薬局→p. 50
横浜の風俗を描く作家北林透馬はこの生まれ。劇作家である妻の余志子とは幼なじみ。

中村汀女句碑→p. 54
横浜税関監視部長となった夫と共に西戸部町の官舎に移ってきた。横浜で多くの句を詠んでいる。

老松小学校→p. 14
「やっさもっさ」「故郷横浜」「横浜の悲哀」などを書いた獅子文六が通っていた。

老松町付近→p. 42
獅子文六は井天通で生まれここに移った。横浜税関の官舎があったため有島三兄弟もここに住んだ。

東福寺(赤門)→p. 24
長谷川家墓所。大佛次郎や吉川英治も幼少の頃この辺りに住み赤門を遊び場としていた。

長谷川伸の碑

犬養孝自筆の碑

馬車道

JR関内

伊勢佐木町通

大通公園

京急日ノ出町

JR桜木町

【目次】

● 改稿 横浜文学散歩

第一部 横浜ゆかりの作家たち

大佛次郎	10	有島三兄弟	42
獅子文六	14	伊勢山皇大神宮	46
吉川英治	20	中島敦	47
長谷川伸	24	北林余志子・透馬	50
直木三十五	30	中村汀女	54
山本周五郎	36	松永延造	56

第二部 作家たちと横浜

称名寺	62	根岸競馬場	73
杉田梅林——妙法寺	66	元町	75
三溪園	68	横浜外人墓地	78
横浜市八聖殿郷土資料館	71	山手資料館	83

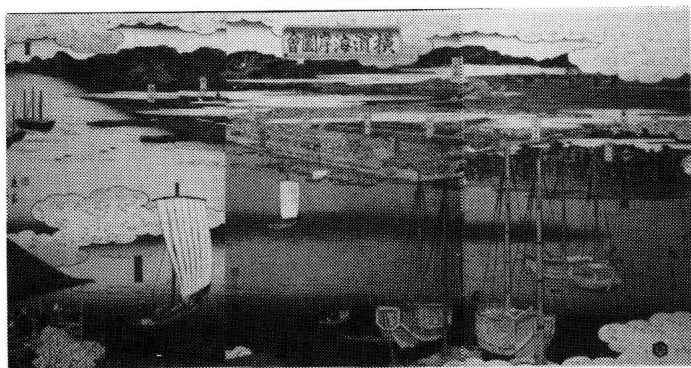
横浜ゲート座	86	横浜市開港記念会館	110
港の見える丘公園	90	日刊新聞発祥の地	113
大佛次郎記念館	93	赤レンガ倉庫	116
県立神奈川近代文学館	95	神奈川県立博物館	118
山下公園	96	伊勢佐木町	121
中華街	99	総持寺	125
ヘボン博士邸跡	103	鶴見	129
大棧橋	105	横浜市立商業高等学校	134
横浜開港資料館	108	横浜小学校	136

第三部 横浜ゆかりの文学作品

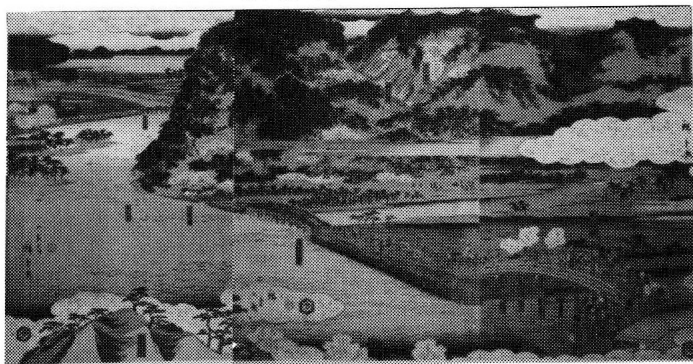
横浜ゆかりの文学作品	137
------------	-----

関内・桜木町・石川町周辺マップ	2	参考文献	165
横浜文学散歩マップ	4	横浜近代文学略年表	168
往時の横浜(横浜絵葉書よる)	35, 41, 53, 59, 65	後書き	184
文学散歩モデルコース	19, 40, 94	索引	190
		装訂／黒川百合子・写真撮影／鈴木俊裕	

《横浜海岸図会》



《神名川横浜港真景》



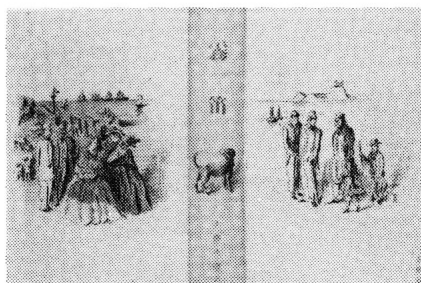
二代安藤広重「大錦三枚続き」万延元年（1860年）3月

「横浜海岸図会」と「神名川横浜港真景」と合わせて六枚続きにもなるが、各々、三枚続きでも独自に観賞できるような二重構造になっている。東海道を下り、神奈川あたりから横浜（本牧から戸部・保土ヶ谷あたりまで）方面を見た風景図。本来ならあるはずの横浜居留地をはじめとして、蒸気船すら描かれておらず（意識的にであろう）古典的な浮世絵となっている。

横浜文学散歩

●第一部

横浜ゆかりの作家たち



開化期の横浜を舞台にした『霧笛』

稿を書きはじめたのが、大衆文学に進むきっかけとなった。ペンネームは、当時鎌倉、長谷の大仏

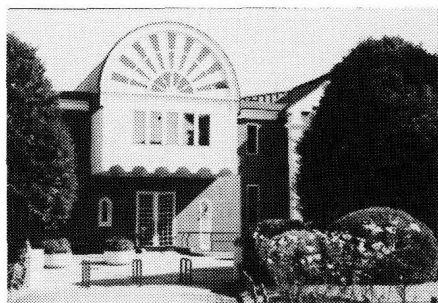
学十日ほどで東京の牛込にある筑土小学校へ移ることとなる。明治43年都立一中、大正4年一高仏法科入学。大正10年東大政治学科を卒業する。卒業後、鎌倉女学校で、国語と歴史を教えていた。その後、外務省条約局へ勤めたが、書籍の購入費が月給を上まわる状態が続き、やむを得ず、娯楽雑誌などに原

裏に住んでいたため、大仏を太郎とするなら、自分は次郎にあたると考え、大佛次郎としたという。この筆名を初めて使用したのは、E・アラン・ポーの作品からアイディアを借りて作った、「^{はやぶさ}隼の源次」(大正13年)という短編から。大正13年外務省を辞め、文筆活動に専念することになる。この年に博文館の『ポケット』という雑誌に「鞍馬天狗」を連載して世に知られるようになる。大正15年には「照る日もる日」が、彼にとつて初めての新聞連載小説として連載され好評を博した。昭和になると、「赤穂浪士」(昭和2年)の連載をはじめ、インテリ層をも含めた大衆の支持を受けるようになる。横浜では、昭和6年頃からおよそ10年にわたって、ホテルニューグランドの三三八号、三二〇号で仕事をした。

●野尻抱影について

大佛次郎の長兄、野尻抱影氏は、英文学者でもあり、作家としても有名であるが、専門家も及ばぬほどの天文学の知識を持ち、啓蒙書・解説を書いた、星座に関する第一人者としても著名である。

明治17年11月15日の生まれ。神奈川第一中学校卒業後、早稲田大学英文科入学。ラフカディオ・ハーンに学んだ。卒業後、山梨県立甲府中学、東京の私立麻布中学で英語教諭として教鞭をとった。大正8年より研究社の正社員となり『英語青年』『中学生』などの雑誌を編集した。大正15年より、J O A K (NHKの前身)で「星に関する講演」を行い、新聞雑誌に、星座考証の随筆を書き、名をひろめた。星への興味の原因は、大正13年の新村出の「南蛮更紗」



大佛次郎記念館
レンガ造りの建物が緑に映えて美しい。

彼は大衆文学者として不動の地位を確立したが、現代ものとして「白い姉」「霧笛」、史伝ものとして「ドレフュス事件」「ブウランジェ將軍の悲劇」などがある。ファシズムが進行する昭和10年に、軍部批判の意をこめて作品を書くなど、幅広い文学活動を行なっ

た。戦後、東久邇内閣の参与になり、GHQから言われる前に治安維持法を撤回することなどを具申した。また、パリコミューンを多角的にとらえた「パリ燃ゆ」や「天皇の世紀」なども書いた。昭和35年芸術院会員。39年文化勲章を受賞。昭和48年4月30日死去。東京の病院から遺体を乗せた車は、ホテルニューグランドの前に止まり、ホテル従業員全員の別れのあいさつを受けて、鎌倉の自宅へ去っていった。大佛次郎の墓は鎌倉の寿福寺にある。

作品

●「鞍馬天狗」大正13年博文館刊。雑誌『ポケット』の12月号分までを収めている。講談からの離脱・新興大衆文芸の確立をめざして、血の通ったもの

で星の和名にひかれてからと言われている。大正14年「星座巡礼」昭和2年「星座めぐり」昭和8年「星座神話」を刊行したが、その後昭和19年に研究社を退職するまでに「星を語る」「星座風景」「星座春秋」「日本の星」「星」など抱影隨筆の代表作が刊行された。戦後は執筆活動が中心で、「星座三百六十五夜」「星と東方美術」など多数の著作を刊行した。「船乗りシンドバッド奇談」などの翻訳書も多数ある。また冥王星の命名者としても有名。「財団法人大佛次郎記念館」の中に抱影の著書が60冊ほど収められているが、いずれも扉に、「愛弟に贈る、著者」と、ペン書きした初版本であるという。昭和52年10月30日、91歳で死去。本名は正英（まさふさ）。

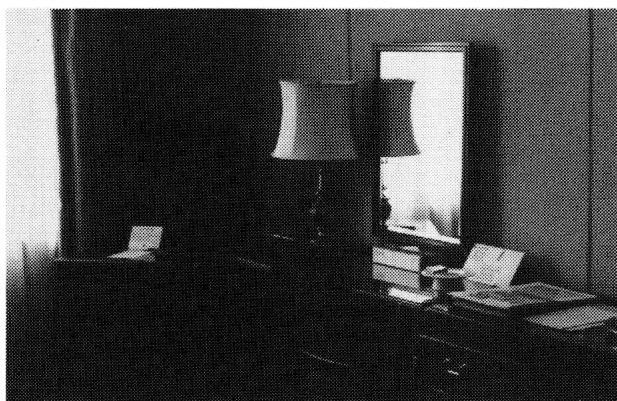
を書く決意を後書において披瀝している。

●「赤穂浪士」昭和3年改造社刊。斜陽化する武士道と新興町人の考えを対立させ、元禄期の文化を背景に、四十七士の行動を描いた長編小説。

●史伝ものとして「ドレフウス事件」「パリ燃ゆ」。現代ものでは、戦後の日本の精神的荒廃の中で良き伝統が失われ、軽薄な風潮のみが謳歌されることに對するいかりをこめた「帰郷」（昭和24）などがある。（昭和24年芸術院賞受賞）

●横浜ゆかりの作品としては「霧笛」（昭和8）「花火の街」（昭和11）「幻燈」（昭和22）「赤屋敷の女」「薔薇の騎士」などがある。特に「霧笛」は、異人館のボーイである千代吉と、主人の英国人クウパー、その愛人お花との関係を、開化

期の横浜のエキゾチックな風物の中で描いた長編小説として、彼の代表作品の一つであるといえよう。



ニューグランド318号室、通称「鞍馬天狗の部屋」

●鎌倉女学校の頃
夫人と鎌倉に住んだのが大正10年。その年教師になったが、仮病を使ってよく休んだらしい。しまいには、生徒が迎えに来たという。

●外務省常勤嘱託の頃
仕事は翻訳。月給80円で毎月の本代が200円。定期券を買うこともできず出勤もままならない。ある日「出勤せよ」との電報が来る。出かけると当時課長だった、後の外相重光葵が「ほかの人の手前、机の前に座ってくれ」と言ったという。十日かかる仕事を一日でやってしまうので、ボンヤリ座っているのが苦痛でもあった。関東大震災後、退職者を募ったのを機に退職した。

●獅子文六

〔本名 岩田豊雄〕

●ゆかりの場所

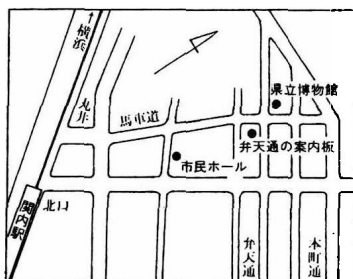
●獅子文六生誕地（横浜市弁天通り三丁目）JR桜木町駅より徒歩10分。横浜の官庁街の中心的な場所で、かつて文六が住んでいた頃の面影はほとんどないと言っても過言ではない。わずかに、弁天通りの案内版がある程度である。

●老松小学校（現横浜市図書館）京急日ノ出町駅より徒歩5分。市営野毛山動物園、市立図書館方面に歩いて行く。戸部に抜ける道を二百メートルほど登

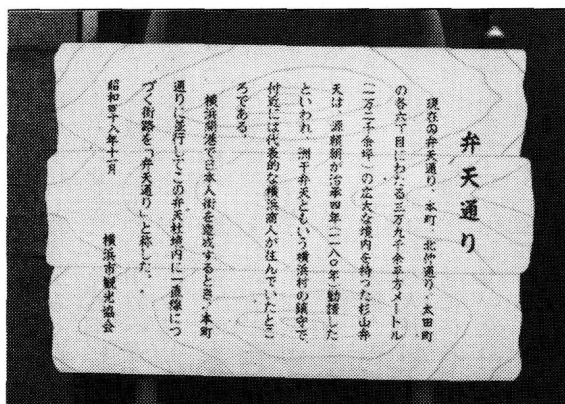
つて行くと、（すぐの信号を左側に曲がる）かつての老松小学校にたどり着く。比較的、昔の雰囲気が残っている。ほうだが、近代化、増築の波に洗われて、そう期待もできない。が、野毛山公園から一望する港や関内方面の眺望にはすばらしいものがある。

●おいたち

横浜市弁天通三丁目に、岩田茂穂と母麻二の長男として生まれた。生後間もなく月岡町に変わった。この地はかつて横浜税関の官舎のあった所で、有



島三兄弟が住んだ土地としても知られている。小学校は現横浜市図書館付近にあった老松小学校に通った。父茂穂の死後、慶応義塾の幼稚舎へ移り、横



横浜官庁街の中心弁天通り。背広姿の人々が行き交う。
かつての面影はほとんどない。

浜を離れたが、母は、姉、弟と共に、横浜に残り、家業の絹物輸出商を続けた。その間、本町一丁目、南仲通一丁目、南太田と移り住んでいるが、母のみで家業を営むのが、容易でなかったらしい。文六は普通部を経て理財科予科に進むが文科に転じ、大正2年中途

●ペンネームについて

獅子文六という筆名の由来は色々あるようだが、獅子文六の最初の出版「色豪伝」で、文豪（文五）ではなく、文六としたという説。（文豪の一つ上をいく作家であるという意味）また、獅子は「百獣の王」である所から獅子（四四）十六と、掛け算の九九をもじったものとも言われている。

●慶応の幼稚舎に行く事になったわけ。

父の茂穂が死んで、母親が店を見ることになったため家庭教育が十分にできないという理由から、転学させられ、寄宿舎に入ったという。

●「海軍」

文六がただ一度、本名で書いた小説。そのわけは、「私は、この作品に限って本名を